

## 研究報告

# 「保健講話」で捉えた高校生の自己概念

加藤千恵子<sup>1)\*</sup>、佐藤恵子<sup>2)</sup>、石川貴彦<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>名寄市立大学保健福祉学部看護学科、<sup>2)</sup>北海道千歳北陽高等学校、

<sup>3)</sup>名寄市立大学保健福祉学部教養教育部

キーワード：高校生、自己概念、保健講話、カフェテリア方式

## I. はじめに

私たち専門職者の「性教育＝生教育」活動は施設内や地域で様々な広がりを見せている。近年、助産師による命の教育が取り上げられ活発な活動が見られる。小中高の学校では、医師による教育、助産師による教育、養護教諭からの教育、体育の担当教諭もしくは担任からの保健体育等の教科の教育と道徳教育をへて、個々人の成長発達に伴う「性＝生」を自己構築するよう系統立てた連携が行われている学校もある。

安河内ら<sup>1)</sup>は、小学校36校の主な性教育担当者と内容について調査している。主な取り組みは養護教諭が行い、「命の大切さを教える」「性について正確な知識を身につける」ことを目的に授業科目で実施し、学年の上昇に伴って外部講師による特別活動が増加していることを報告している。

高校生を対象とした保健講話の中で、学生がどのようなニーズを持ち、講話を担当する専門職者にどのような役割が求められているのかを把握するため、事前と事後の質問紙調査から評価した。また、学生の変化や自己概念の傾向を講話の前後で比較し、変化した背景や要因（性差）を捉えることで、「保健講話」の影響について明らかにすることを試みた。このように、これらのまとめの積み上げが、児童、生徒、大学生に対する保健講話で活用する基礎資料になると考えている。

## II. 研究方法

### 1. 研究対象

本研究の対象は講話に参加した高校3年生40名で、女性47.5% (19/40)、男性52.5% (21/40)であった。性教育の基礎的な知識は習得済みであった。

### 2. 講話内容

講話の内容は、事前にテーマと内容を示したものから、対象学生が興味・関心を抱いたテーマの講話を選択し、受講するという松浦が勧めているカフェテリア方式<sup>2)、3)、4)、5)、6)</sup>で行われた。

今回、2012年〇月〇日(〇) 5.6校時目、「タッチケアと感染症の予防」～自分を癒し、相手を癒す方法と自分を守る、相手を守る方法～と題して、高校の保健の講話の50分2コマを外部講師として担当し、「保健講話」を試みた。

依頼内容は、具体的にイメージできる視聴覚教材と体験講話にして欲しいというニーズに基づき、触れ合いと感染、コミュニケーションのあり方に重きをおいた。高校生が講話を楽しんで受講し、内容が印象に残るように体験項目には妊婦疑似体験、胎児人形に触れる、新生児人形に触れる機会を作り、コミュニケーションゲームという一定ルールに従ったビーズ玉の交換を行うことで感染の広がりを実感できる参加型の内容を導入した。特に、自分と相手を守ることや癒し方については、タッチケアと下肢のマッサージを付け加えた。パワーポイントは、恐怖感だけを煽る性感染症の病気の写真は使用せずに、大学生が描いた病原菌や男女の違い、月経のメカニズムと症状がわかるイラストを示し、絵から暖かさが感じられるように配慮した。

\* 責任著者

住所 〒096-8641 北海道名寄市西4条北8丁目1番地

E-mail:chiekok@nayoeco.ac.jp

講話は、1) 命のバトンを受け継いだ、身体的、精神的、社会的存在で、自分が生まれ、育ってきた経過を振り返ること。2) ふれあいについて学び、エイズを中心とした性感染症の広がりについて実感すること。3) 自分を癒し、コントロール方法を知り体験することの3点を主な内容とした。今回の講話が及ぼす影響について、客観的に捉え、その結果を担当教員へ絆ぐことを目標とした。

### 3. 調査期間

2012年11月30日～2013年1月31日

### 4. 調査内容と方法

調査は、質問紙を作成・配布し、講話前後に質問紙を用いてアンケート調査を行い、無記名で回収した。

調査内容は、性別、Lorish & Maskinnの「幸せ」から「悲しみ」までの感情を、目の周囲と口、涙を用いた20段階からなるフェイス・スケール (The Face Scale)<sup>7)</sup>、ジェンダー・アイデンティティ尺度の性受容の10項目中から3項目と自己概念測定尺度<sup>8)</sup>の47項目中から高校3年生が理解できると考えられた各10項目を選別し改変させた20項目からなる独自に作成した質問紙を使って調査した。

#### 【調査内容】

##### (1) ジェンダー・アイデンティティに関する項目として

- a. この性別に生まれてよかった
- b. 違う性別のほうが幸せだ
- c. この性別だから厳しくしつけられた
- d. 性別のくせにといわれる
- e. 将来の親像が描ける
- f. 将来赤ちゃんがほしい

##### (2) 自己概念に関する項目として

- a. 自分を良く知っている
- b. 自分をコントロールする方法を知っている
- c. 「短気」と「気長」
- d. 「強い」と「弱い」
- e. 「陽気な」と「陰気な」
- f. 「真面目な」と「不真面目な」
- g. 「にぎやかな」と「静かな」
- h. 「素直な」と「強情な」
- i. 「大人っぽい」と「子どもっぽい」
- j. 「不潔な」と「清潔な」

##### (3) 社会性の項目として

- a. 家庭で学校のことを話す
- b. 相手の考えをよく察する
- c. 「無口な」と「社交的な」
- d. 「暖かい」と「冷たい」

以上の項目において、(1)のa.b.c.d.e.fと(2)のa.b.(3)のa.b.は「まったく当てはまらない」「どちらかといえば当てはまる」「どちらかといえば当てはまらない」「とてもよく当てはまる」の4段階で、(2)のc.d.e.f.g.h.i.jと(3)のc.d.項目は、相反する気質で「とてもそう思う」「ややそう思う」「どちらともいえない」「ややそう思う」「とてもそう思う」の5段階で該当する箇所には各々○をつけてもらった。

## 5. 分析方法

分析方法は男女別と授業の前後で20項目についてクロス集計し、ノンパラメトリックのMann-WhitneyのU検定を行った。自由記述の部分は質的分析を行った。

## 6. 倫理的配慮

倫理的配慮として、質問紙の説明、配布、回収は講師と講話担当教員4名が行った。質問紙の回答は無記名とし、研究の主旨、任意性と匿名性、成績には関係しないことを口頭で説明し、承諾を得た。データはランダムに番号を割り当て番号処理でデータ管理を行い、個人が特定されることはなく、プライバシーは完全に守られる形で行った。高等学校管理部門の承諾を得て行った。なお、この研究は名寄市立大学倫理委員会の承認を得ている（継続）。

## III. 結果

### 1. 講話前後の男女別の特徴

講話前、男女別で「違う性別の方が幸せだ」「将来どんな親になるか想像がつく」「陽気な・陰気な」「不潔な・清潔な」「フェイススケール」の5項目で有意な差が認められ、講話後、「この性別に生まれて良かった」「違う性別の方が幸せだ」「家族に学校の出来事をよく話す」「不潔な・清潔な」の4項目で有意な差が認められた。

#### 1) ジェンダー・アイデンティティと自己概念の特徴

図1は、「この性別に生まれて良かった」の講話前後と男女差を示した。講話前、自分の性別に対する肯定感に男女差は認められなかったが、講話後、女性に比べ男性の方が男性に生まれて良かったとした割合が有意に高かった ( $p=0.012$ )。

図2は、「違う性別の方が幸せだ」の講話前後と男女差を示した。男性に比べ女性の方が「違う性別の方が幸せだ」とした割合が、有意に高かった。講話前に比べ、講話後の有意差が $p=0.033$ から $p=0.012$ となり、男女差は増していた。

図3は、「どんな親になるか想像がつく」の講話前後と男女差を示した。講話前に、男性に比べ女性の方が「どんな親になるか想像がつく」とした割合が有意に高かった ( $p=0.008$ ) が、講話後、男女差は認められなかった。

図4は、「家族に学校の出来事をよく話す」の講話前後と男女差を示した。講話前に、男女差は認められなかったが、講話後、男性に比べ女性の方が「家族に学校の出来事をとてもよく話す」とした割合が有意に高かった ( $p=0.034$ )。

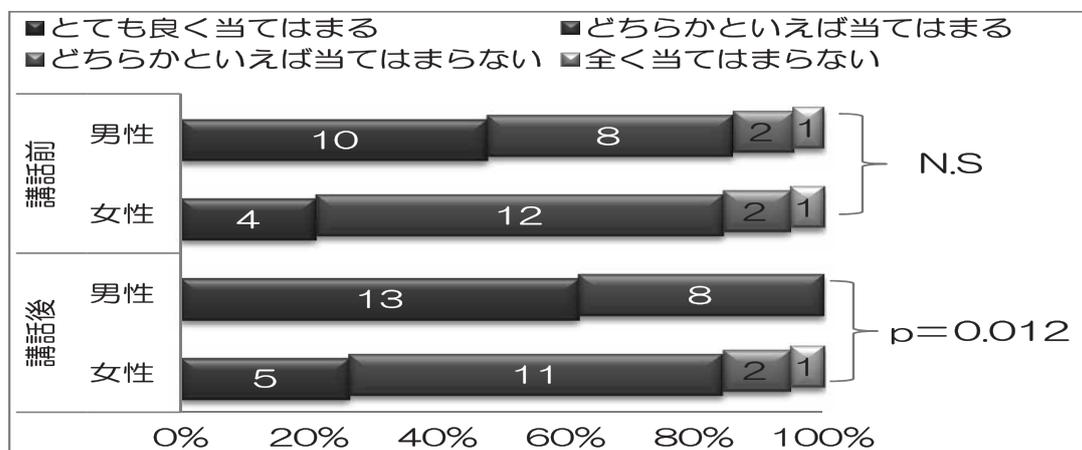


図1 「この性別に生まれて良かった」の講話前後と男女差

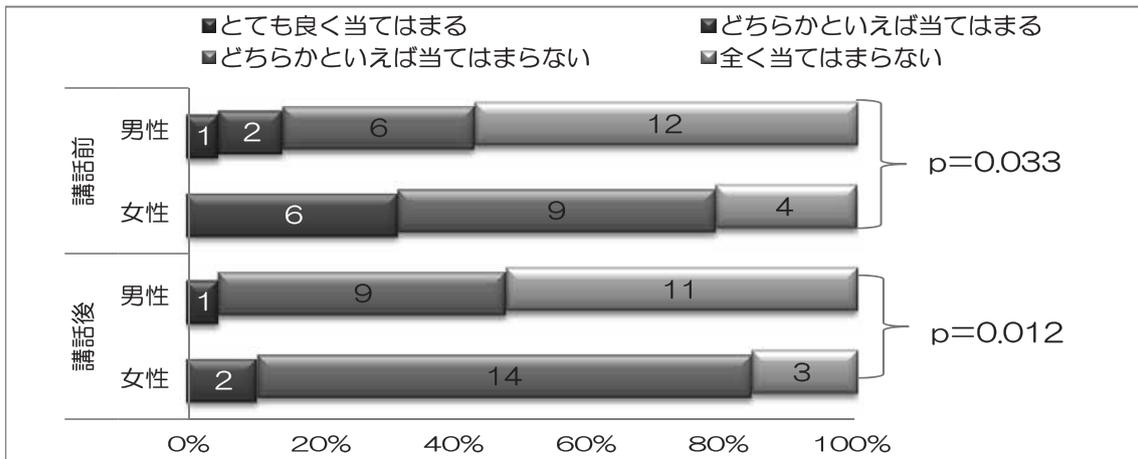


図2 「違う性別の方が幸せだ」の講話前後と男女差

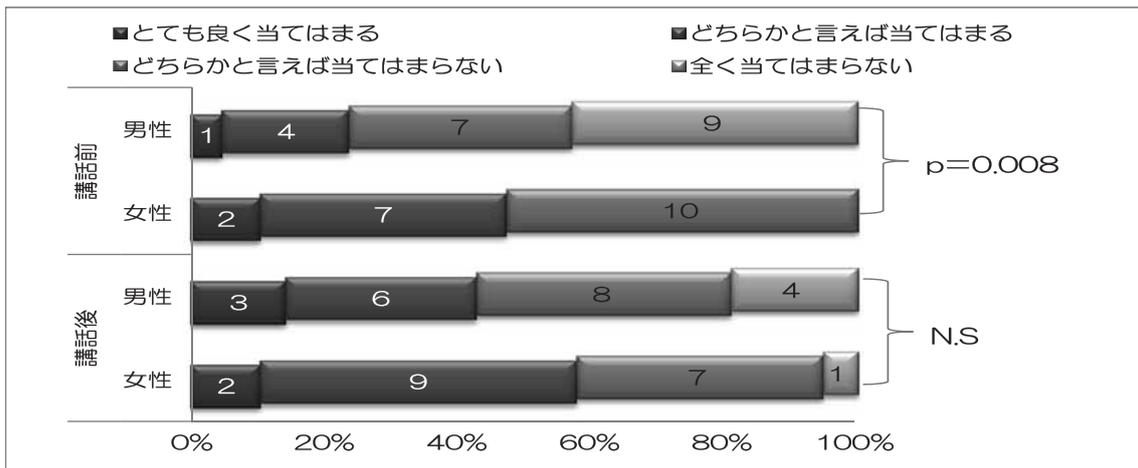


図3 「どんな親になるか想像がつく」の講話前後と男女差

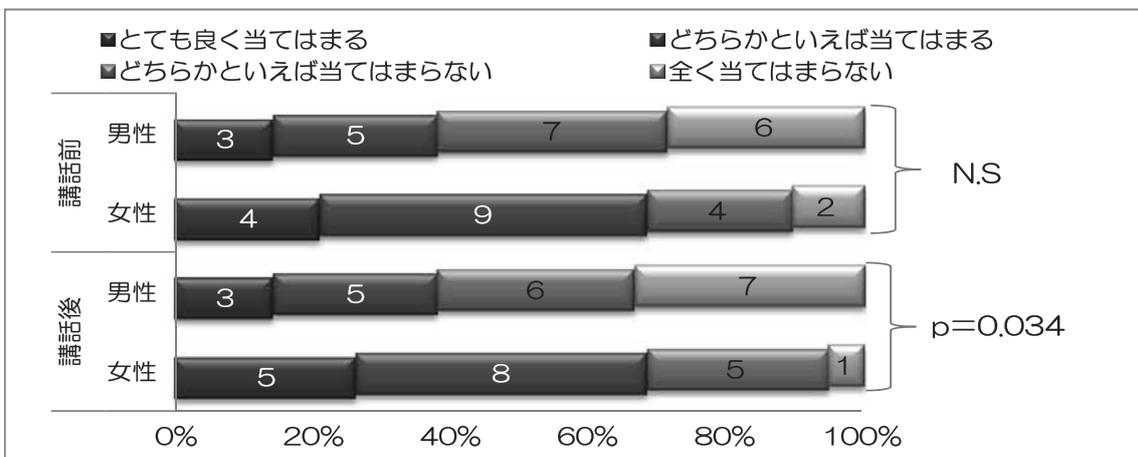


図4 「家族に学校の出来事をよく話す」の講話前後と男女差

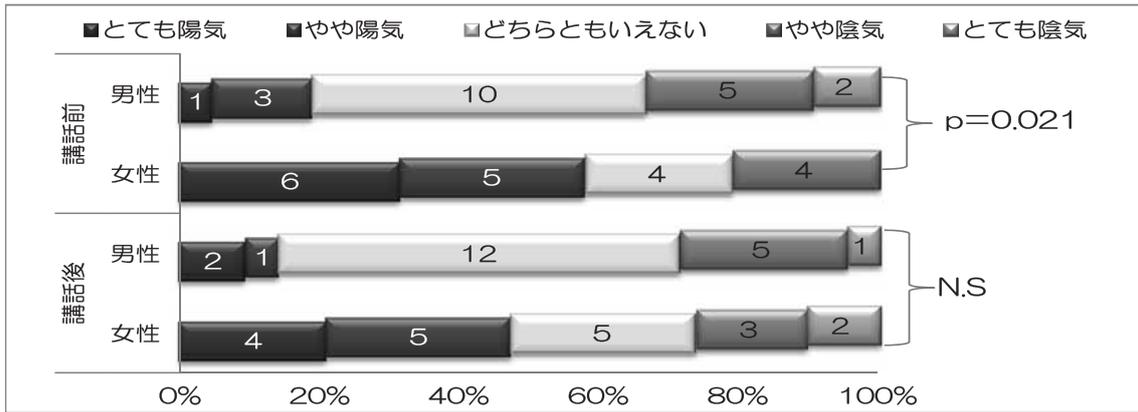


図5 「陽気・陰気」の講話前後と男女差

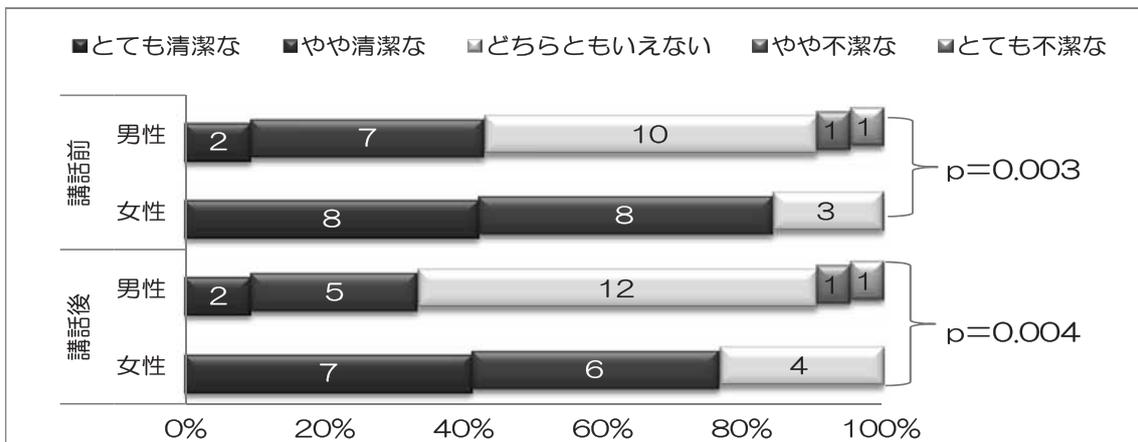


図6 「清潔な・不潔な」の講話前後と男女差

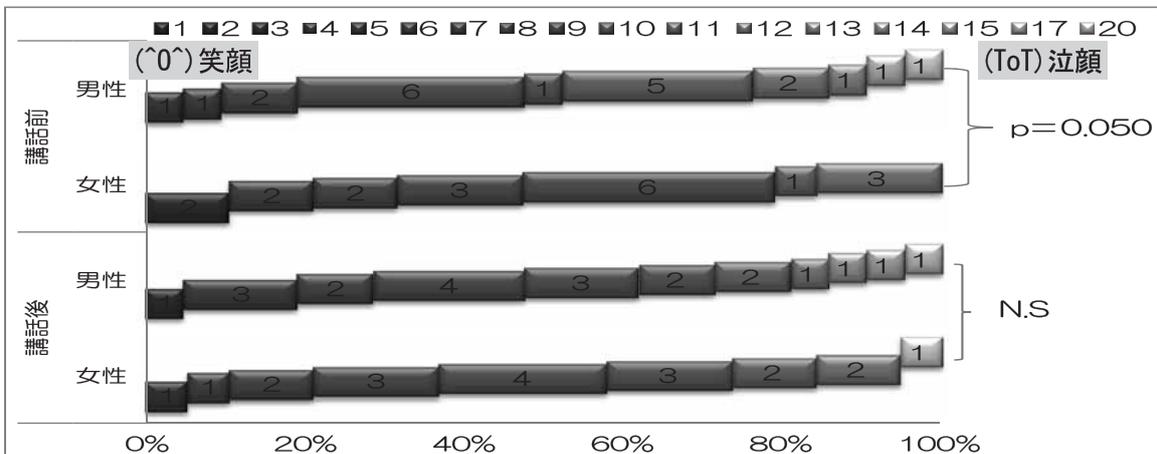


図7 講話前後と性別のフェイススケール

図5は、「陽気・陰気」の講話前後と男女差を示した。講話前、男性に比べ女性の方が「陽気」とした割合が有意に高かった ( $p=0.021$ ) が、講話後、男女差は認められなかった。

図6は、「清潔な・不潔な」の講話前後と男女差を示した。講話前後ともに、男性に比べ女性の方が「清潔な」とした割合が有意に高かった (前 $p=0.003$ 、後 $p=0.004$ )。

## 2) フェイススケールの特徴

図7は講話前後の「性別とフェイススケール」を示した。講話前、男性は表情の笑いと泣き顔が両極端であった。また、男性に比べ女性の方が笑顔の割合が有意に高かった ( $p=0.050$ )。講話後、フェイススケールで男女差は認められなかった。

## 2. 講話前後の特徴

講話前後での特徴は、20項目における有意な差は認められなかった。

## 3. 講話前の自由記述内容

事前アンケートでは、興味・関心のあること、身近に解決したいことを自由記述してもらった。ここでは、「音楽」「自分の感情をコントロールしたい」フェイススケール1（満面の笑顔）の者が、「最近になって我慢できないことが増えた。イライラしてしまう」と3人が記述していた。今現在、満面の笑顔状態と選択した2人が自己の感情についてコントロールする術を求めている記述内容であった。

表1 講話の理解度別学生評価と記述内容

1) の男性	小中高と命の大切さや性の事、12年間の集大成みたいなものだった
	社会人になって自分が気をつけないといけないこと、知っておかないといけないこと、将来の自分に必要な事を教えてもらった
	妊娠の疑似体験で、女性の大変さがわかった
	赤ちゃん人形は首が座ってなくてとれそうで怖かった
	胎児の成長している途中の姿の変わり方にびっくりした
1) の女性	自分の命は、たくさんの人からのバトンで、生まれてからたくさんの人に助けられて、今の自分がここにあるとわかった
	エイズに感染することで様々な病気になるとわかった
	これからは自分の命も、他の人の命も大切にしようと思った
2) の男性	親から見れば、生まれてきてありがとうという気持ちがわかったし、自分の赤ちゃんを持つことの意味、そして母親がどれだけ苦労したのかわかった
	H I V 予防に気をつけなければ、自分だけの問題ではない
2) の女性	赤ちゃんを触り、ビーズでウイルス感染を体験し、最後にはマッサージとかして良かった。感染は怖いと思った
	赤ちゃんの写真を見て、命はこんな小さいところからはじまると思い、自分が大きく成長したことが、奇跡の重なりと感じた
	妊婦体験をして、この重さの中で大切に守ってくれたお母さんの偉大さを実感した
	タッチケアでは、人と触れると安心をもたらすと思った
	人は人と支え触れあって生きて行くと感じた
	この先はじまる新しい人生も、人を大切にし、自分を大切に周りに感謝し生活したい
4) の男性	難しくてわからなかった。今までにも聞いたことがあった。赤ちゃんの重さが印象に残った。
5) の女性	赤ちゃんの頭にへこみがあるのは何故かと聞いたら、優しく丁寧に「骨がまだくっついていないから」と教えてもらった。たくさん資料と共に色々な知識を学んだ

## 4. 講話後の自由記述内容

話の内容の理解度順に、主な記述内容を示す（表1）。聴講した学生の評価は、1) わかりやすくよい内容だった28人（男性15人、女性13人）2) まあまあわかった10人（男性5人、女性5人）3) 少し難しかった0人、4) 難しくてよくわからなかった1人（男性1人）、5) その他1人の回答であった。

## IV. 考察

本研究の男性は、「男性に生まれてよかった」「将来どんな親になるかイメージできない」「陰気な」「不潔

な」「家庭に学校の出来事を話さない」、女性は「男性に生まれたほうが幸せ」「将来どんな親になるかイメージできる」「陽気な」「清潔な」「家庭に学校の出来事をよく話す」という特徴が講話前から男女差が明確に生じているものが多く、この状況の中で、保健講話を行うことでどのように作用したか変化を捉えると男性の性別に対する肯定感は強化され、将来の親像に対するイメージがつく。女性は家庭に学校のことを話す状況を想起し、やや陰気になるという変化が現れていた。女性がやや陰気になったのは、人工妊娠中絶、妊娠、性感染症という女性の体に起こるトラブルを重く受け止めたために変化したものと考えられた。

### 1. ジェンダー・アイデンティティに関して

「この性別に生まれてよかった」「違う性別のほうが幸せだ」「将来の親像が描ける」では、男性の自己の性別に関しては肯定感を増し、女性の自己の性別に関しても肯定感は増していたことから、各性別に対して肯定感が増す講義であったと評価できる。

「将来の親像が描ける」では、女性は、親になるイメージを大部分できていたが一部に具体的に考えたときに全く想像ができない段階にあることを自覚した者がいた。男性は、父親モデルが傍にいないとイメージできないことが考えられるが、親になるイメージを膨らます機会になったと評価できる。

今後も、遺伝子的には、女性が基本形でホルモンの影響や受容体を持つことなどで男性になっていることや男性は様々な役割から危険にさらされる機会が多く、平均寿命の点からも差があること、女性は、女性ホルモンで守られている部分があることを伝え、男女の違いがある中で、お互いを癒しあって生きていく存在であることを強調していきたい。

### 2. 自己概念に関して

「陽気な」と「陰気な」では、講話前、男性に比べ女性の方が陽気とする割合が有意に高かった ( $p=0.021$ )ものが講話後、男女差が認められなかったことから、女性の月経に関わるマイナートラブルや人工妊娠中絶、妊娠、性感染症という内容を真剣に理解し、受け止めたことによる結果が陽気さに影響したのと考えられた。

「不潔な」と「清潔な」では、講話前後で、男性に比べ女性の方が清潔とする割合が有意に高く ( $p=0.003, 0.004$ )、清潔に関する男女差は変化がなかった。

今後も、感染やふれあい方について話をする中で手がいかに汚いか強調し、学校で呼びかけられている「手洗いやうがいの励行」について後押しする内容としたい。また、極端な清潔観念に対しては、匂いの大切さから日本人の社会から匂いが隠されている例を挙げ、赤ちゃんが親の匂いをしっかり覚えていること、記憶と匂いの結びつき、思春期の体臭が生じる意味を説明し、必要な匂いについて伝えたいと考える。

### 3. 社会性に関して

「家庭で学校のことを話す」では、講話後、「家族に学校の出来事をよく話す」の項目で有意な男女差が生じ、男性に比べ女性の方が家族に話す割合が有意に高くなっており、講話後に家庭でのやり取りをより鮮明に想起したことによる変化であり、講話内容で家族を意識する機会になったと考えられた。

石沢らの研究では、「家庭での性教育の担い手は母親が55%を占め、両親の分担は28%、父親は3%」と述べており<sup>9)</sup>、偏りのある家庭教育の役割分担の中で育った家庭基盤と学校生活における役割から判断し答えたものであると考えられる。男性の方が表現しない特性をもつのか、学校のことが伝わりづらいという結果から、特に男性の保護者に対して対策を考える必要がある。

学校での様子を伝えることで家庭の教育力を活用できるように、情報伝達が円滑に家庭へ伝わり、その結果が学校教育へと変換されるような良い循環は、子どもの成長の見守りに欠かせない環境条件である。

今後のフォローアップとして、男性は女性に比べ有意に学校のことを家族に伝えておらず、男子の家族に対して、学校の様子がわかるような通信の発行や保護者とともに考える機会を持つための保護者と学生が聴講できる共同講話を行い、共同な話題で親子が対話できることが必要であり、講話後に持ち帰ることのでき

る媒体の準備は不可欠である。

#### 4. 学生の評価記述から

自己の存在の経過を振り返り、掛け替えのない大切な存在としての自己を感じとることができた。また、自分の赤ちゃんの頃へと想いを振り返りつつ、幼い赤ちゃんという存在を妊娠の経過に伴う胎児の成長・発達から概要をつかみ、大きさや重さを実感することができていた。

自己の再認識を促し、自分自身と他者に対する癒し、コントロールする術を活用し、将来に向けて役立てようとする意気込みが感じられ、これから社会生活や進路を選択していく時期に講話の機会があったことは時期的に適切であったと考える。一部に難しいという印象を与えた部分は、参加型で企画展開した体験と興味・関心を持つきっかけになるエピソードのバランスを考え、わかりやすく表現する試みが必要であると考ええる。

以上のことから、保健講話は、男性にはジェンダー、女性には社会性や気質というように、同じ講話を受講しても、作用するところが性別によって異なることが示唆された。

## V. 結論

1. 講話前、男性に比べ女性の方が「男性に生まれた方が幸せだ」「将来どんな親になるか想像がつく」「陽気」「清潔」「笑顔」である割合が有意に高く、講話後、男性に比べ女性の方が「男性に生まれた方が幸せだ」「家族に学校の出来事をよく話す」「清潔」である割合が有意に高く、さらに、女性に比べ男性の方が「この性別に生まれて良かった」とした割合が有意に高いという自己概念の特徴があった。
2. 保健講話は、男性は自己の性別を肯定的に捉える機会となり、女性は違う性別に生まれたほうが幸せとする気持ちを強化し、さらに、陽気さや笑顔という特徴を認められなくなるという影響があり、男性はジェンダー、女性は社会性や気質に作用することがわかった。

## 引用文献

- 1) 安河内静子, 樋口善之, 石村美由紀, 三根有紀子, 浅野美智留, 鳥越郁代, 古田裕子, 松浦賢長: 福岡県立大学看護学部紀要2巻2号, pp68-78, 2005.3
- 2) 江崎和子, 松浦賢長: カフェテリア方式による性教育における児童の準備性に関する研究, 思春期学, 24巻1号, pp113-114, 2006.3
- 3) 江崎和子, 松浦賢長: 小学校におけるカフェテリア方式性教育3年間の実践に関する研究, 思春期学, 26巻1号, p112, 2008.3
- 4) 松浦賢長: 性に関する授業の計画と目標設定, 心とからだの健康, 子どもの生きる力を育む, 16 (1) pp58-61, 2012.1
- 5) 松浦賢長: カフェテリア方式による性教育—その濫觴にあたる—, 心とからだの健康, 子どもの生きる力を育む, 16 (2) pp58-63, 2012.2
- 6) 松浦賢長: カフェテリア方式による性教育—約束事と実例—, 心とからだの健康, 子どもの生きる力を育む, 16 (3) pp58-63, 2012.3
- 7) Lorish CD, Maisiak R: The face scale: a brief, nonverbal method for assessing patient mood, Arthritis Rheumatism 29: pp906-909, 1986
- 8) 土肥伊都子: ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成, 教育心理学研究Vol44(2), pp62-69, 1996.1
- 9) 石沢敦子, 矢島まさえ, 佐光恵子, 小林亜由美, 梅林奎子: 思春期における子どもの性教育のあり方(その2) —性教育における看護職の役割—, 群馬パース学園短期大学紀要, 6巻1号, pp13-20, 2004.3